会議録

会議の名称		第４回子どもの居場所部会
事　務　局		子ども家庭部子育て支援課
開催日時		令和３年４月２１日（水）１９時から２０時３０分まで
開催場所		小金井市役所第二庁舎８階　８０１会議室
出席者	委員	部会長　萬羽　郁子　委員 職務代理　水津　由紀　委員 部会員　北脇　理恵　委員　古源　美紀　委員 鈴木　隆行　委員　谷村　保宣　委員 村上　洋介　委員
	事務局	子育て支援課長　冨田　絵実 子育て支援係長　古賀　誠 子育て支援係　山下　真優 児童青少年課長　鈴木　剛 児童青少年係長　前田　裕女
傍聴の可否		可・一部不可・不可
傍聴者数		２人
会議次第		１　開会 ２　子どもの居場所について ３　閉会
発言内容・発言者名（主な発言要旨）		別紙のとおり
提出資料		１　資料１２　子どもの居場所部会報告書の概要（案）

第４回子どもの居場所部会　会議録

令和３年４月２１日

○萬羽部会長　　それでは、ただいまから、第４回子どもの居場所部会を開催いたします。

本日は、鈴木恭子委員から欠席の連絡をいただいておりますので、御報告いたします。

次第の（２）子どもの居場所についてを行います。前回は、「目指すべき姿」について審議しましたが、本日は、前半を前回の続きとして、「目指すべき姿」について、後半を「施策提言」についての審議に充てたいと思っています。

初めに、事務局から資料を提出いただいておりますので、事務局からの説明をお願いします。

○子育て支援係長　本日は、皆さんのお手元に資料１２、子どもの居場所部会報告書の概要（案）を配付させていただいております。本資料は、前回の本部会で配付させていただきました資料１０をベースにして、前回御審議いただいた内容を反映させていただいております。具体的には、２、「目指すべき姿」及び３、「施策提言」の各項目になります。事務局では、大まかに作っておりますので、この形にこだわらず、審議の中で固めていただければと思っております。

また、本日は、参考資料として、子どもの居場所部会第３回の審議メモを配付しておりますので、本日の審議の参考にしていただければと思います。

事務局からの説明は以上です。

○萬羽部会長　　事務局から御説明いただきましたが、よろしいでしょうか。

この後、まず最初に２番の「目指すべき姿」についての審議を行いたいと思うんですが、審議に入る前に、もし確認事項や簡単な質問などございましたら、お願いいたします。よろしいでしょうか。

では、早速ですが、審議に入りたいと思います。まず、２番の「目指すべき姿」について審議を行いたいと思っております。書いていただいてある内容を、資料１２の２番の「目指すべき姿」を御覧いただき、何か御意見や、追加でこういうことが必要なのではないかとか、ここはこういう表現のほうがいいのではないかというような意見がありましたら、自由にお願いいたします。では、村上委員、お願いします。

○村上委員　　ちょっと前回も申し上げたんですけれども、子どもの居場所の中で、「目指すべき

姿」というところで、私が言っているのは、学校という居場所があって放課後の居場所がないという人だけではなくて、学校へ行っていない不登校の人たちが約１割ぐらいいるわけですから、不登校の、ほかに居場所がない人も行ける場所というようなニュアンスを入れてほしいというのを前回も申し上げたんですけれども、ちょっとこのニュアンスだとそこが薄いので、「実現可能なまち」とか「意見を反映するまち」というスローガン的なものよりも、学校に行っていなくて、下手をするといないことにされている子どもたちが存在感を確認できるような、全体の中での考えでいいと思うんですけれども、約１割の不登校、あるいはほかにいろいろなことを加えると、何かしら問題を抱えている子どもというのはいると思うので、取りあえず漠然となってしまうんですけれども、そこのニュアンスをもうちょっと強く、意思を込めて入れていただきたいなということです。

○萬羽部会長　ありがとうございます。お願いします。

○鈴木隆行委員　この「目指すべき姿」の（1）、（2）、（3）に入る前のところに「いつでも、誰でも、どこでも」と書いてあって、それ自体はいいと思うんですけれども、その内容を括弧書きで説明してくれているわけですが、この括弧書きで説明しているがために、内容を絞っているようになっているんです。特に気になるのは、多分村上委員ともかぶるのですけれども、「誰でも」と書いてあるところに「お金があるなしにかかわらず」と括弧書きされていると、そのお金を持っているという軸上だけで「誰でも」を評価しているようになってしまって、「誰でも」といったら、もっといろいろな方向性の誰でもがあるはずなのに、限定してしまっているような文章になっているので、ここは少し変えたほうがいい。そう見てみると、「いつでも」も「どこでも」も、何かもうちょっと書きようがあるだろうし、そうだとすると、括弧の中が多分大きくなり過ぎてしまうんだと思うんです。だから、形式として、「いつでも、誰でも、どこでも」があっていいと思うんですけれども、つまりこういうことだよというのを別建てで書いていいのではないですかね。そうすれば、村上委員の言うようなニュアンスも容易に込められると思うので、ちょっとそういう方向で検討してもらったらどうかなと思います。

○萬羽部会長　ありがとうございます。その２で、ここの括弧に関しては、暫定的にというか、メモ程度に入れているというようなイメージなんでしょうか。

○子育て支援係長　先ほど資料の説明でも申し上げたのですけれども、この様式を前回、このフォーマットの案として御提案しています。前回の審議の結果のキーワードになってきた部分の

ところをピックアップして、最後に口頭でまとめさせていただいたものを便宜上入れているというところで、「いつでも」の趣旨のところのキーワードとして、予約や登録とかという、例えばそういう捉え方なので、あと、必ずしもこの形を守らなければいけないのではなくて、御提案している枠をいきなりこちらのほうから覆して、全然違うもので御提案するのもちょっと違うなと思ったので、皆さんに膨らませていただきたいという意図を持って、あえて事務的に埋めています。なので、それを補足するために参考配付している、前回の審議のときに皆さんが話していただいた口頭で出てきた言葉をそのままメモしたような形のものをお配りしていますので、その辺りも思い出す材料にしていただきながら、記載はどんどん変えていただくという御相談を今回していただいていいと思っています。

○萬羽部会長　ありがとうございます。

では、何か、今のに関連してでもよいですし、何かさらにありましたらお願いします。古源委員、お願いします。

○古源委員　資料１２を見せていただいてちょっと感じたことは、「いつでも、誰でも、どこでも」というキーワードを挙げてきてはいるのですけれども、これは大人側の視点だなとすごく思ったんです。子どもの居場所と考えている中で、今、では子どもが何を望んでいるのかなということを考えたときに、子どもが行きたい場所でなければいけないし、子どもが行って、そこにいたいと思える場所でなければいけないし、あと、いたいと思ったら、そこに子どもがいられる場所でなければいけないし、そして、また行きたい場所でなければいけないのかなと思ったんです。そういう理念の中に子どもの目線、子どもの気持ちが少し入れられたらいいのかなとちょっと思ったところです。

あともう１点は、「目指すべき姿」というのは、１０年後の子どもの居場所をイメージしてということでやってきていると思うんですけれども、ここで「目指すべき姿」の３つのキーワードが「まち」になっているんです。確かに、みんなのワークショップの中でも、拠点が整備されるだけではなくて、まち全体が子どもの居場所であればいいよねという話で出てはいるのですけれども、掲げる目標というか理念として、１０年後が果たしてこれは「まち」なのかなというのをちょっと思っているところなんです。もちろん、もう少し先ではないかなと。もう少し具体的な居場所が整って、子どもが尊重されて、意識が醸成されて、みんなにとっていい小金井になっていくというのが流れなのかなという感想です。そんなことを思いました。

○萬羽部会長　ありがとうございます。確かに、「子どもが選んでできる」とは書いてあるけれども、それ自体が何となく子ども目線ではないという感じが、大人目線の感じがちょっと強いかもしれないですね。

ほかにいかがでしょか。

○谷村委員　ちょっとこれがという話ではないんですけれども、村上さんの話とかを前回終わった後に少し考えて、大人から子どもに何をしてあげられるかというところでいくと、不登校の子どもとかというのは、圧倒的に９割の子どもが過ごしやすいというか、過ごせている学校というのがあって、１割の子がそこになじめないというか、正直言ってついていないというイメージで僕は思っていて、運が悪いと。そういう点でいくと、運が悪いと思ってしまう子どもをなくしたい。そういう多分不運というか、何か、社会全体としてずっと不運をなくすという方向に動いているんだと思っていて、そういうところでいくと、そういう、つい子どもに「今の社会は俺にとってついていないな」と思われたくない、思われないような社会というか、それも「いつでも、誰でも、どこでも」というのも、「俺はついていないな」と思われないような、タイミングもそうだし、「誰でも」もそうだし、そういうのをキーワードとして入れられたらいいかなと。今後何か事業をやったときに、それは一つの閾値になるかなと、キーワードとして「ついていない」というのが発生しているのか、していないのかという、一つそういうのはどうかなと思っています。

○萬羽部会長　おっしゃることはとても分かるので、その「ついていない」という表現が、どういう表現にしたらいいか、ちょっとほかの……。

○谷村委員　子どもから、「何か俺、ついていないな」という……。

○萬羽部会長　すごくいいキーワードだなと思いつつ、もうちょっと何か、子どもの視点でそれを表現する、もう少し……。

○谷村委員　「ついていない」のは入れておいてほしい。

○萬羽部会長　そう、「何かついていないな」はしっくりくるんだけれども。

○谷村委員　かぎ括弧とかでいいから。

○萬羽部会長　どういう表現にしたらいいか。

○村上委員　だから、「ついていない」というのも分かるんですけれども、多分、意識としては、「俺は変わっているけれども、参加したい」とか、ちょっとそういう意識はあると思うんです、不登校の子どもというのは。「ついていない」というのは、世の中はちょっと

違うなという……。

○谷村委員　居心地の悪さも何か関係しているのかなというか、その居心地の悪さというのが多分その子にとって、ついてないという、結果としてついていないという。うちの娘は多分その類いなので、結構学校を相当休んでいるけれども。

○村上委員　社会がもっと幅広く受け止めてくれれば、もっと「ついていない」から脱却できるということでしょうね。

○北脇委員　居心地の悪さはなくしてあげたいですね。何か、「ついていない」と思うのは、居心地が悪いから「ついていない」と思うんだから、子どもたち誰もが、居心地がいいと思える、居心地が悪いと思わないとかというところ。

○谷村委員　いや、違います。それは多分、ごめんなさい、違って、圧倒的多数に居心地がいいことはすぐできるんだと思うんですが、その中でも居心地の悪さを感じる子は一定数絶対にいて、その子たちに別の選択肢というものを提示できるようなものがあれば、そういう意味で言う、「俺は、みんながやっているのは苦手だけれども、こういうのが別にあるや」という補完できるような感じのものがあったら。圧倒的多数が居心地がいいところというのは、実は小学校は多分そういうのを目指していると思うんです。ただ、あくまでそれは、村上さんはクエスチョンマークですけれども、僕も若干今言っていてクエスチョンマークはありますけれども、でも……。

○谷村委員　なので、代わりの何か。みんなが居心地いい場所というのは、どだい僕は無理だと思って。

○萬羽部会長　そうですよね。逆に、みんなが居心地がいいと思い過ぎてしまうと、疎外感を感じやすくなってしまうのかなという側面は確かにあるなと今思っていて、居心地が悪くてもむしろ気にならない面があると。

○谷村委員　違うのがあると、そうですね。「俺、こっちがあるからいいや」という。

○萬羽部会長　確かにその辺が、ニュアンスはとても分かるんですけれども、どう書いたらいいか。

○水津職務代理　それが多分、多様な子どもに対するものだと思うので、形としてずっと思っていたのが、ここの「いつでも」何とかという話のところをもう少し、そういう「すべての子ども」というか、いろいろな子どもたちがそれぞれ自分にとって居場所になるべきところがまちの中にあるべきだというようなことを書いて、その括弧書きのところをちょっと一回なしにして、その下のところに「安全安心なまち」などと同列に、ちょっと抜けているなと思ったので、「どんな子どもにも居場所があるまち」みたいなものを入れれば

その部分がケアできるのかなと思ったので、ここの仮に書いていただいたものだから、当然そうなるんだけれども、この上の部分をもう少しすっきりと分かりやすく厚く書けば、下のところは箇条書でポイントを挙げていくみたいな形でいくと、すっきり収まるかなと。

○萬羽部会長　むしろ、その箇条書の中にももう一回、例えば最初に「すべての」とか、「多様な」ということを含めたようなことを……。

○水津職務代理　そう、「どんな子どもも」みたいな、「どんな子どもにも居場所があるまち」みたいな形で。

○萬羽部会長　そうですね。「どんな子どもも」と最初に言ってしまって、その後に「安全安心」とか、今あるものが続いてもいいぐらいの。

○水津職務代理　そうそう。だから、皆さんが言っていたのは、「安全安心」はもちろんあるし、子どもの意見が反映できるような場所であるべきだし、それが持続可能な組織とかシステムでなければいけないというのがあったんだけれども、その中で「どんな子どもにも居場所のあるまち」というキーワードは、上の説明だけで収まっているので、下に出して、あえてそこは出したほうが……。

○萬羽部会長　確かに、強調するというか、必要ですよね。

○水津職務代理　だから、居場所は、どんな子どもにとってもというのは、一つの場所がどんな子どもにもではないと思うんですよ。なので、いろいろな子どもがいる場所があるということだから、そこの居場所がどんな子も受け入れなければいけないということではなくて、そういう子どもたちが行けるような安心した場所があるということを目指しているのではないかなと思うので、それが分かるような表現が欲しいかなと。

○鈴木隆行委員　いろいろな子どもがいて、どんな子どもにとってもということですよね。

○水津職務代理　どこか一つはそういう場所があるような……。

○萬羽部会長　決して一つの場所で全部がということではなくて、例えば選択肢がたくさんあって、その中にどこかを探せるといいなと思います。

○鈴木隆行委員　理念としては分かるんです。先ほどから議論になっているマイノリティーの話ですが、その個別のケースは僕はあまり事例を知らないので申し上げにくいところはあるのですけれども、そういう子にも、どんな子が仮に来ても、対応すべきところが何かしらあるというのを目指すというのはいいのですけれども、果たしてそれができるのでしょうかということをここで議論したらまずいですか。何と言うのかな。

○谷村委員　　実現性ですか。

○鈴木隆行委員　もちろん、建前としてと言ったらすごく語弊があるのかもしれないんですけれども、それは目指したいし、目指すべきだとは思うんでけれども、どんなというのはあらゆる可能性があって、例えば倫理的に駄目な要求を持っている子は駄目なわけだし、例えばほかの子が楽しんでいる姿がもう嫌だと言ったら、それはちょっと困るわけですよね。そういう態度の子だったとしたら、そうしたら何らかの指導をしなければいけないということになると、どれぐらいまでカバーしたらいいのかというのをどう捉えたらいいのか。それをこの提言に盛り込むかというのはまた別の話なんだとは思うんですけれども、ただ、「どんな」というのはどれぐらいまで含んだ「どんな」なのかというのが僕にはちょっとよく分からないんですよね。例えば、居場所を欲している場合には「どんな」という、何かそういうニュアンスにしたらいいのかなと。何か、難しいですね。

○谷村委員　　欲しないというのも、後から欲しなくなってしまったというケースもあると思っていて、不登校の子も、最初は別に、いたんだけれども、あるときから変わるということもありますし。現状、小学校と通級という形があって、そこに関してはある一定の成果も上げていると思うんです。学校の授業にうまくなじめなかった子に関しては、そのようなケアでできるところが大きくあると思って、今、現状はまだそこから完全にケアし切れていないだけで、あとはリソースの確保だけかなと思っているんです。なので、多分ゼロ・１００までは議論は難しいと思うんですけれども、圧倒的にカバーできるところは授業でカバーできるかなと思う。あとは予算の話とかになってくるのかしれないんですけれども、現実的なところでいくと。ただ、予算というのも何とかなるようなところなのかなという。今、小学校の中という限定的な話をしたのですけれども、その小学校のシステム的な話を市民全員がある程度共有できていたら、社会としてはケアできるかなと。分かっていない方が圧倒的に多いところでケアできていないのかなというのがあって、認知するところからまずはスタートかなということです。

○水津職務代理　ちょっと最近やっている学生さんが、もくせい教室に通っているお子さんとお母さんとつながってしまって、自分で小さいサークルみたいなものをつくって、そこでその子と一緒に遊んだり、将棋を教えるんだけれども、いきなり学習支援といっても、ちょっと宿題を見たりするような感じのものをつくりたいんだと言っているんですよ。例えばそういうことを支援できるというか、ということがすごく必要で、何か大きい建物の中で、不登校の子はこっちに来なさいとか、そういうことではなくて、そういう子たちが

小さい集まりでも何かつくれて、居場所みたいなものが、それは毎日ではなくてもいいと思うんですよ、月に２回とかでも、そこに行ったら、そこでその人と認められて、遊べる空間があるとかということが、まちの中に常設であるとかではなくても、そのようなものも子どもの居場所として支援できるようなシステムとか、そこをネットワークするようなものとかがあると、それは本当に学生が始めるものだから小さいものなんだけれども、同じようなことができるかもしれないし、もう少し大人の力でできることもあるかもしれないしと思うと、そういう小さいものを子どもの居場所と観念的に捉えて、そういうものを子どもの生活圏の中に置けるようなものが必要かなと思っていて、その話をしていて一番ネックになったのが、場所がないことだったんですよ。公民館を月に２回借りるのがすごく大変で、「そういうことができる場所がどこかにあったらいいのにね」とかという話をしていたので、そこの支援とかも必要なのかなとか、建物が圧倒的に少ないんですよ、市内は。

○萬羽部会長　ちょっと今の話を聞いていて私が個人的に思ったのは、もちろん実現可能性で、実際に出来上がるというところも大事だと思うんですけれども、それが全てではなくて、そういう声をちょっと聞くとか、それを支援するバックアップ体制を一応整えておくという意味で、「どんな子どもにとっても」というのは大事な概念なので、そこは今の議論で入れるという方向で大切にしつつ、（2）とか（3）に「子どもの意見を反映する」とか「実現可能な」という言葉も出ているので、そっちのほうで何かもうちょっと、例えば「小さな声を酌み取る」とか、（2）も「一緒になってルールづくり」というのだけ、ここは今の形だと「ルールづくり」というのにちょっと特化し過ぎてしまっているので、ルールだけではなくて、そういう子どもの意見を、相談できるとか、聞く姿勢があるよという形で、ちょっとその辺でフォローできないかなというのも思ったりはしていました。必ずしも全てできるかは分からないんですけれども、でもそういう声を聞いたりとか、そういう支援が必要だといったときに、どこに相談したらいいか分からないとなってしまうと、なかなか次に進めないので、そこを酌み取れるような姿勢をこの辺で出せないかなと思ったりしています。

○鈴木隆行委員　僕が最初に言いたかったことは、まず子どもたち全体を集めたときに、大多数の人はこうですよねというのがありまして、そこをまずさせるのは容易であるとか、既にある程度はあるというような状況だとします。すると、そうではない人たちが一定数います。このそうではない人たちの中の大多数は、例えば自信を喪失しているとか、そういう状

況だとします。そうすると、分母を変えただけの議論なんですね、これは。そうではない人たちの中の大多数を救うということになると、また取りこぼしが出てくるという話になりますよね。それを何階層するのかという話なのか、それとも、もうそのように結局一般化してしまって、こういう人たちもいるからこういうことをしましょうというと、どうしても取りこぼしが出てくるから、すると何か個別に対応するような制度をつくる、システムをつくるということを「目指すべき姿」として考えなければいけないのかというところは議論に値すると思うんですけれども、それは現実的なのかなという質問だったんです。

○萬羽部会長　分かりました。すみません。なるほど。

○谷村委員　今その話を聞くと、さっきの小学校のレベルでいくと、通級に関しては個別です、もう。通級というクラスの中で、全体に当てはめるのではなくて、個別、子どものキャラクターに応じた対応を全部しているので、個別対応は、もう既に９割はいないけれども、残りの１割を個別対応するので、リソースにはそこそこ学校ではある程度ケアできてきているところはあるけれども、まだそれでも取りこぼしているのが現状だと思うんですけれども、その方向で行く分には、僕はもっと効果が上げられるだろうなと思っていて、なので、ちょっと話は変わりますけれども、３５人学級を目指すとかと言っているけれども、そっちではないだろうなと、リソースを割くのは。４０人学級とか５０人学級にして、そっちのリソースを充てたほうがよほど多分学校は回るだろうなという気がします。逆に言うと、マジョリティーのリソースを下げていいかなと思っていて、比率がちょっと違うかなと。なので、そういう見方でいくと、現状のリソースの配分で、ある程度のケアは有効にできるかなと思います。

○鈴木隆行委員　もしそうだとすると、こういう形の整備をすべきだという議論ではなくて、フレキシブルに対応できるようなシステムをつくるべきだという提言をここに入れなければいけないということになりますね、この会議的に言って。

○谷村委員　そうですね。

○鈴木隆行委員　方向性として、そういうことでよいかということですね。

○萬羽部会長　お願いします、谷村委員。

○谷村委員　ちょっとこの流れで。提言がどのように今後の議論で生かされるのかというのを、ごめんなさい、ちょっとせっかちなので逆算したいなと思っていて、今後何か事業があったときに、こういう子どもの居場所事業がありますといったときに、この「目指すべき

姿」（1）、（2）、（3）で、「○、△、×」がついてポイントが高いものが事業採用されるとか、そういうイメージでいきますかね。「○、○、×」、「○、○、○」だったら、この「○」が３つついているものが提言の中により当てはまっているから、事業として採用しようとか、それとも「○」が１個しかついていないで、残り２つ、「反映するまち」とか「持続可能なまち」というのが「×」だったときに、その事業が採用されるのかとかということ。実際にこういうものを作ったときというのは、それをどう運用するかというところまである程度ビジョンがないと、この提言は多分ふわっと「明るく元気なまち」というところで終わってしまうと思うんですよ。ではなくて、これが今後どういうフィルターになるのかというところはどんな感じでというか、そこが多分結構ポイントかなと思っています。

○萬羽部会長　　事務局、お願いします。

○子育て支援課長　まず、その「ふわっと」に該当してくるところは、ビジョンの部分だと思うんです。それがその先の「施策提言」に落とし込まれていくところで、例えば「持続可能な」というところで、どういうところがフォローされれば持続可能になり得るのかみたいなものも含めた形で書いていただく。その中で、どんなものが事業になっていくかとかというのは、別に今お約束できるわけではないんですけれども、その中で具体化しそうなものがあればとか、市内の取組で、ここを支援すればそれの実現になるのではないかというところがあれば、そこを検討していくのに、なぜその事業を支援するか、例えば個人の方の取組とかがあったときに、なぜその人たちの取組を取り上げるかというところの根拠づけにはなると思っています。

○谷村委員　　根拠づける重みというのをどうつけるのかなというのが、今回いただいた「施策提言」のところの項目が出てきて、それに対して「○、×」をやるしかないとか、そういう意味ですか。

○子育て支援課長　いや、特にそのような「○、×」とか、これが「◎」とか、そういうのはこちらとして設定は今していないところです。

○谷村委員　　そうすると、例えば何個か事業があったときに……。

○子育て支援課長　何個か事業がというよりは、「施策提言」というのは切り口になってくるのかなと私は捉えていて、例えば何か具体的に事業化するときに、その切り口から見たときに、これを事業化するということは、この切り口のこれとこれに合致する。それは重要だと。「施策提言」としてあえて挙げられている切り口に合致してくるものというのは、審議

会意見を踏まえても重要度が高いでしょうというような進め方ができるのではないかなと思っています。

○水津職務代理　基本的に、今まで子どもの居場所に関してのビジョン的なものというのは、そんなに持てていなかったところにもってきて、それを作ろうとしているわけですよ。ビジョンはないんだけれども、今ある施策をくっつけていろいろなことを市としては、行政としてはやっている。でも、それの根本的な考え方としては、このように子どもの居場所は捉えなければいけないんだというそのビジョンがあれば、幾つかの具体的な施策提言があったとすれば、それがやがて、こちらのほうで審議したこういう事業が当てはまれば、それが審議会でも出てきた意見として、これを採用できるかとか、これが近いものかという形のものの素材として、市民の声としてこれが必要なので、今のように皆さんのお時間を使って議論しているところなので、そのように、だから今まで何もなかったものを作っていると認識していただければなと思うんですよ。

○萬羽部会長　すごく具体的な施策提言を今イメージしてくれていたんですよね。

○谷村委員　そこでいって……。

○萬羽部会長　これだというものが具体的にあってということですよね。

○谷村委員　いろいろな事業があって、逆に切ることも必要だと思っていて、そういうときの評価というのが、客観的な評価ができないと難しいだろうなと思っていて……。

○水津職務代理　それは誰が切るの。

○谷村委員　予算的なリソースの都合で、そこは全部見直しする……。

○水津職務代理　それは優先順位の話になるのではないですか。

○谷村委員　そうそう。そこは当然あるものだと思います、リソースは限られているんですから。それをどこで線を引くのか。ここから下はやめます、ここから上は続けます、これは新しいものが出てきたら、これはラインの上だからやりますといったときのこれに値するのが今回の提言だと思っていて、今回の提言というところで、ある程度の社会像を描くわけじゃないですか、子どもの居場所に関する。逆に、その線を引けないんだとしたら、あまり、ごめんなさい、ここまで議論してきたんですけれども、意味がないのかなという……。

○水津職務代理　それは、要するに実現可能でなければ意味がないということですね。

○谷村委員　この提言がそういうフィルターに使えないのだとしたら、意味が、この提言自体が、それこそさっきの「明るく元気で愛が一番」みたいな、それでということになってしま

うかなと。

○村上委員　　ちょっといいですか。私はある程度イメージを持っていて、この「施策提言」のところに、もともとそれが一つのモチベーションでこの会議自体に参加しているので、不登校のある程度特化した居場所をつくるという項目を入れたいんです。そのときに、いろいろなものがあるんですよ。もくせい教室というか、教育支援センターがあって、さっき言われた通級教室があったりとか、あとは民間のものもあったり、項目を入れたときにいろいろなものがあって、最終的には財政支援が必要なんですけれども、それが、みんなで議論した中で、最終的に市なのか、議会なのか、予算がつくのか、つかないのか、つけばいいし、つかなければ、少ないのであれば、その中で一番優先順位が高いものに関してはちょっと意見を言いたいなとか、そういったイメージで、実際にはいろいろなものが今あるのだけれども、まだ不十分なんです。そこに少しでもお金もつけてほしいし、人もつけてほしい。それを小金井の中で順位をつけて、それで少しでも今よりも前に進めばいいのかなというのが、私のイメージです。

○水津職務代理　基本的に、私は、全部が市の事業であるべきだとは思っていないというか、市としてこれだけの事業を全部やるための提言だとは思っていないんですよ、お金を出したものとして。ただ、民間のやるものを支援するという行政のやり方があると思うので、その支援が必要なんだということが分かる根拠としての提言になると思っているので、ここで挙げたものは、市の中で直営で市がお金を出して全部やるということではないと思っているのね。そうでなくても居場所はつくれると思っているので、そこのところがどう思っているのかなという感じです。

○谷村委員　　では、そのお金のつけ方というのも、明確な評価がないと駄目だと思うんです。この事業をやっていて、「ちょっと困っているから、月５万円渡します」と。それはどういう基準で渡したのかというのを客観的に問われたときに、こういう評価をして、ここには５万円という、例えば先ほど９割・１割の１割の困っているところの１０人に対してのこういうところで、ここの「施策提言」のところのポイントが７ポイントでというのがあって、ほか、次にまた似たようなものが来ました。ちょっと違う、ちょっとディテールが変わったのが来ました。それを一律５万円なのか、こっちは１０万円渡すのかというのをどうやって評価するのかという。その評価の仕方というのは、最初閾値を決めるのは、多分間違えるというか、あると思うんです、大体でやるので。それが、年々その問題点を解決していって閾値というのをだんだんとより明確にしていくべきであって、

最初からそのラインを抽象的なところでいったら、どこまでたっても抽象的な、最後まで何も決まらないんだろうなと思って、結局声が大きい人が勝つみたいな、そういう状態になるのは僕は嫌だなと思って、市に顔が利くどこどこのおじさんが全部金を持っていってしまったみたいな、そういう落ちは一番、何だろうなと思ってしまって。そこでいくと、ある程度評価基準というのを明確にしておくべきだろうなと思って。

ごめんなさい、ちょっと市のやり方にそぐっていないのかもしれないんですけれども、普通、民間企業でいったら、事業を評価するというのは全部これなんです。こういう事業をやりたいといったら、それがどういうポイントなのかというのは全部表があって、そのポイントに合致して、そのアウトプットがどうかで初めて予算がつくので、こういう会社のスローガンに合っているから１０万円とか、そんな会社があったら即潰れると思うんです。ではなくて、ある程度の基準というのがある。毎年その基準は見直すにしても、基準を設けてある。その基準が今回の「施策提言」なのかなと思うんです。

逆に、市がそこら辺に潤沢にお金があるというのだったら、別にジャブジャブやっていただいて結構なんですけれども。

○子育て支援課長　おっしゃっていることはすごく分かりますし、すごく真っ当だなと思います。そこはすごく分かります。予算とか人的な部分とかに関しても、選択と集中をするというのは必要です。それをやるための線引きを、正直に言って、私はそこまでの閾値をこの部会にがつっと定めてもらおうとは思ってはいなかったです。ただ、その閾値よりも上に上げるための材料になってくれるものになっているかなというイメージでした。

谷村さんのおっしゃってくださっている、基準を設けてあげないと、これからどうしていいか分からないよねというのはそのとおりで、それを昔やっていたのが、多分島根県か三重県かで最初に始まった行政評価だと思うんです。全部の事業について数値評価をして、数値評価になじまない事業も全部数値に置き換えて、人員工数とか、予算とかと、あと評価基準を設定して、利用者が増えたとか減ったとか、どういう効果が上がった、下がったというので、それを基にその事業の拡大なのか、縮小なのか、継続なのかを決めようというのをやったのが行政評価だったんです。小金井市でも前にやっていました。やめました。

私は一職員なので、それをやめたとかやめないが正しいとかという判断はできないのですけれども、一職員としてその事業担当をやっていたときに行政評価がどうだったかというと、ものすごい負担でした。私はそのときたまたま、人数は少ないけれども、事

業数だけはものすごく持っている担当で、３人しかいない係で４０か５０ぐらい事業があったので、事業評価をするために残業するみたいな状態になっていたというのと、あと結局、市役所の業務上、それを利用している人が少ないとか、効果がはかりにくい事業をやめていいという判断がすごく難しいんです。何をもって縮小するかということになったときに、特に福祉分野の事業とかだと、一人も取り残さないみたいな理論になったときに、利用者が減ったら、それはやめていいかとか、その効果が分かりにくいからやめていいかというところの判断が結局担当としてはつかなかったんです。多分、担当者が一次評価者になって、その上位の人とかが上の評価をしていって、物によっては議会とかにも報告していたと思うんですけれども、それでも、ほぼやめるとかという選択になった事業というのはあまりなかったと思うんです。新規事業を作るとか、事業を拡大するツールになるんですけれども、選択と集中の集中をするためのツールにならなかったんです。それはやり方が悪かったのかもしれないんです。もっといいやり方があるのかもしれないんですけれども、取りあえず、以前やったときは、それに至る効果は生まれなかったという判断が恐らくあって、やめたんだと思います。

その閾値を設けてあげたいと思ってくださるのはすごくうれしいんですけれども、ではどうなったら閾値になりますかね。

○谷村委員　例えばさっきの「施策提言」のところの項目が、もう少しそれを分解した形で、例えば１０項目挙がったときの「○、×、△」でポイントをつけるのが一番簡単なことになります。それにプラスして、例えば発生コストがあって、それをやるためのコストが幾らです。例えば、５万円以下の事業であった場合、「○」が３つあればもうゴーだよとか、１００万円以上使う事業だったら、「○」が１０個ついていないと通れないよとかというようなやり方とか評価の仕方もあるかなと。

先ほど負担になってしまうというお話があったんですけれども、そこは事業規模で例えばフィルターをちょっと緩めてあげるということもありかなと思って、１０万、５万とかの少額の事業などは、評価は紙１枚でいいよとか、あとまた１，０００万円、１億円使うようなものに関しては、もう少しスケジュールを含めて逐次報告しろというので、その中で、それをできるだけのリソースでやる、できるリソースでやれる範囲をやるというのが、昔やっていたけれども、大変でやめましたという、それもゼロ・１００だと思うんです。それはゼロになっていいのかというのはあって、ではなくて、できる範囲でもそれは続けなければいけなかったのかなと今、僕自身は思っています。

○村上委員　　とりあえず、ビジネスの企業の話とはちょっとニュアンスが違うと思いますよ。企業というのは、利益という目標があるから、そうやって算出するけれども、行政とか政治の評価というのは、なかなかそう簡単にはできないと思うんですよ。だから、さっき言った行政評価とかも最近はあまり聞かないですけれども、これは個人的な意見ですけれども、それはあまり正しい方法だと思わないんです。行政の評価を数字で出して、だからこそ切るものがなかったということになるので、だからビジネス調の評価、取捨選択とはちょっと違う。だからみんなで話し合って幾つか案を出した中で、その案というものがあるというのをまずみんなで共有して、その中で優先順位をつけていくみたいなところ。そこで予算が幾らかは全然分からないですけれども、今より増えればいいし、増えなければ増えないで、また何か考えないといけないのかとか、私の立場で言えば、情報発信を違う方法でしなければいけないのかとか、そういうことになっていくのかなと思うんです。

○水津職務代理　現状、ないんだよ、予算は。だから、それを出すための根拠として、こういうことを考えられるから、このためにはこういうものが必要なのではないかということに結びつくものがほしいわけ。今、ほうっておくと、子どもの居場所というのは、行政施策でいくと、放課後子ども教室と児童館と学校なんですよ。それも市が直接やっているものではなくて、民間のところにも子どもの居場所はいっぱいあるのではないか、そのことをちゃんと子どもの居場所として構築したほうがいいのではないかというのがもともとの出発点なので、そのために、居場所というのは本来どういうもので、ではこれを子どもの居場所として考えられるものなのかとか、可能性のあるものなのかということを洗い出した中で、子どもの居場所が、では私たちが思うのは、最初からみんなが言っていたように、子どもが歩いていける場所になければ駄目なのではないかとか、全ての子どもに対しての受入れのある場所が必要なんだとか、そういう細かい話を積み上げた中で、ではこれは市にとってとても必要なことだから、こういう予算をつけてほしいという要求をするのがこちらの仕事なので、そのような仕組みの一つの手段なんですよ。

例えば、市が直営のお金を出すことだけではなくて、例えば相談、先ほど言ったようなこういう子どもの居場所をつくりたいといったときに、どういう支援ができるのかということを相談できる場所があるとか、そういうことに対してもあるので、例えば市というのは、小金井市はお金がないんですから、小金井市にはお金はないけれども、この事業だったらこのお金が出るのではないかという相談に乗るとか、そのお金がかかるこ

とばかりではないものがあって、それを全て含めて、子どもの居場所がどうあるべきか、それを実現するために何ができるのかという話を積み上げていくための第一歩の基本的な考え方が今求められていることだと私は思っているんだけれども。

はい、どうぞというか、私が言うことではないな。

○古源委員　頭がすごく整理された気がするんですけれども、子どもの居場所という事業自体が今回「のびゆくこどもプラン」の中で重点事業になっているということで、この部会が設けられたと思うんです。その中で、今まではなかった、例えば子ども食堂の補助金が創設されたりとか、そういった流れの中で、それをいかに拡充していくかというところを、この部会で方向性で行くのかなと私は今思っています。

○水津職務代理　それは一つの例として、今の子ども食堂だったら、これだけのお金が出る。では、それを市内でやっている人たちの――なかなか今はうまくいっていないんですけれども、ネットワークをつくって広げるのかとか、そういうことも含めて、ではほかの方法はないかとかということが、私たちやっている人たちだけでは分からないようなことが行政と一緒に考えることでできたらいいなというのがあって、それをするための根拠になるために、全ての子どもに居場所が必要なんだよとか、どういう場所が必要なんだよという話をしたかったのが部会なんですけれども。

○谷村委員　過去形になってしまって。

○萬羽部会長　すみません。ちょっと時間も限られていることと、あと今はちょっと次の議論と関係する内容になっているなと思ったので、ちょっとここで、すみません、少し戻したいんですが、申し訳ありません。

今、「目指すべき姿」について考えてきまして、もちろん、また戻りながらになるとは思うんですけれども、一旦、次の「施策提言」のほうに入りたいと思います。「施策提言」を考えるに当たって、ここでは具体的な事業を考えるというよりも、今の議論の後半になっていたように、まずは２番の今話していた「目指すべき姿」で挙げたような項目とか、この「目指すべき姿」を実現するために、どうすれば実現できるのかというか、具体的な細かい事業というよりは、どうしたらこれを実際に本当に実現できるのかというところで、今本当におっしゃっていたようなこととも関連すると思うんですけれども、その辺りの意見を後半はいただきたいなと思っているので、残り３０分ぐらいになってしまうんですが、「目指すべき姿」を実現するために、どうすれば実現できるかというところで少し御意見をいただいて、そこからちょっとキーワードとして「施策提

言」のほうに少しポイントを絞っていきたいなと思っていますので、今の議論の関連でもよいのですが、御自由に発言いただければなと思います。鈴木委員、お願いします。

○鈴木隆行委員　まずですけれども、「目指すべき姿」という文言は変えてもいいんですか。

○子育て支援課長　いいですよ。いい感じにしてください。

○鈴木隆行委員　「目指すべき姿」というと一つになってしまうので、何か必要なものとか、重点的に考えなければいけないポイントとかというのを述べておかないと、要するに、大きな部分を見なければいけないし、小さな部分も見なければいけないしということを一緒くたに言おうとするのは無理なので、ここはちょっと変えたいなと。代案があるわけではないんですけれども、「目指すべき姿」だと一つになってしまうので、そういう点で変えたいなと思うんです。多分、先ほどの議論と少し関係すると思うんですが、僕は谷村さんと一緒で理系なので、言いたいことはよく分かっていて、閾値を設けるというのは、ある関数化してパラメータで評価して考えましょうということですので、項目を考えたときに、それぞれの重みをつけて、重みづけで価値を評価しましょうということだと思うんですけれども、多分それは理系の発想です。僕が何年か全体会議に参加していて思ったのは、これは意見の一つとして出せばいいんですよね。それで、ここで出てこなかったら採用されないけれども、出ていれば採用される可能性があるというぐらいのものなのではないですか。だから、言っておかないと、市民からの声がゼロになってしまう。ゼロにしないために、ちゃんと盛り込んでおくというのが、多分意義なんだと思うんです。だから、それを価値があると思うか、ないと思うかというのは、結構疑問があるところだと思うんですけれども……。

○谷村委員　ごめんなさい、そこに僕は価値を見いだしていない。

○鈴木隆行委員　なるほど。でも、声を出さないと、誰からも言われていないことなので、考えてくれないということなんだと思うんです。だから、そういう意味では、言っておかないといけないという場所なんだと思います。だから、後で「しまった、言い逃した」というのをなくしたい。

○谷村委員　村上さんがさっきおっしゃった、事業性にそぐわないという、普通のビジネスにはそぐわないというお話なんですけれども、そこの重みづけに僕は失敗していると思っていて、重みづけ、だからさっきの９割・１割の話を聞くと、平等に重みをつけてしまうと、９割であってしまうんだけれども、１割の重みを、係数を変えてあげれば、それは事業として評価ということはできると思って、その重みづけに失敗しているから、１割とか、

福祉というところが消される可能性があると思うんです。１割の重みといったら、一人を取りこぼすことの社会的なリスクというものの重みが十分に評価されていないと、それが取りこぼされてしまうかなと。なので、そこは一般企業においても、そこに重みをつけてやるというところは十分にあると思うので、そういうものをやれば、取りこぼしはなくなるのかなと思うところもあると……。

○村上委員　今の話で言うと、まさにそういう話があって、私は、文部科学省のその担当の方の不登校のセミナーみたいなものがあって、お話を聞きにいったことがあるんですけれども、結構、現状はすごく理解されているんです。それで予算がつかないというところで、その父兄も集まって話をしたときに、具体的な成果が、こうして予算をつけたらこう改善したみたいなものがないから、予算がつかないんですみたいなことを言っていたんです。それはそれとして、僕は、少数派だから、なかなかそこの問題を認知……、まだ多分、不登校の実態とか、その苦しさとかというのは、当事者ではない方はなかなか、人数が少ないということもあるのでしょうけれども、自分が経験したことがないと、なかなか難しいのかなとは思います。

ちょっと関連して言うと、私は、前にも言ったんですけれども、会社でよく言葉をどうしようかとか、何度もやってきたことがあるので、もちろん言葉も大事なんですけれども、そこを吟味するよりも、不登校の当事者で、もうやむにやまれず、さっき鈴木さんが言われたみたいに、民間で集まっていろいろやっていることがあるんですね。その人たちが何をしてほしいか、どうしてほしいかというのをちょっと吸い上げたような形でやることを考えると、具体的に幾つかアイデアはあるんですよ。ちょっとの手助けで救われることがあるので、そこを施策の中に入れていってほしい。少ない予算でも助かるような話はあるし、そこから広げていってほしいなと思うんです。

○水津職務代理　その重みをつけるための議論なのではないですか、ここに入れるということは。「全ての子ども」とか、「どんな子どもにも居場所が必要」というところの「不登校の子ども」とかというところを入れ込むことによって、その係数が変わってくるということでしょう。

○村上委員　そうです。おっしゃるとおりです。そうですね。

○水津職務代理　にならないの。

○谷村委員　係数は、今……。

○村上委員　人数は少ないけれども、ウエートをちょっと高めてねという話ですよね。

○谷村委員　　でも、実際に今はずっと９割・１割の話になっていますが、１割の子を見過ごすというか、見落とすということ自体が、９割の子にとってのデメリットだよというようなことも、そういう重みづけもあると思うんで、それでもっと比重を重くしてあげればいいのかなとは思っているのですが。

○水津職務代理　１割の子のためにすることは、無駄なことではないわけですよ。そのことがすごく必要、重要なのは、子どもの権利のことを考えたときにとても重要なことで、９割ではなくて１割だから要らない、いいんですではないじゃないですか、子どもの権利のバージョンからいくと、全ての子どもが対象なので、そこのところで、ただ、今までその施策の中とか市の考え方として、では不登校の子は、確かにもくせい教室はあります。でも、放課後の居場所としてどういうことを考えてきたかとかということが、施策としてなかなか上がりづらいところを、民間のものとかを使ったりとかしながら、できるようにしなければいけないということを例えば入れられたとするならば、そこにちゃんと日が当たってくるのではないかと思うんですけれども。

○村上委員　　そうですね。

○水津職務代理　障がいのお子さんなども、自分たちでサークルをつくって遊んだりとかしているじゃないですか。

○村上委員　　だから、これは本当に一般的な話になってしまうけれども、マイノリティーというのはいっぱいいるわけじゃないですか。不登校があったり、ＬＧＢＴがあったり。そうすると、全ての人がマイノリティーみたいなところから入っていけば、その人数も、１割に対する見方も変わってくるのではないかというか。

○谷村委員　　みんなが障がい者という。

○村上委員　　みんなが何かしら変わっているところがあるよという、マイナーな部分があるという。

○水津職務代理　それは、多様な子どもに対してということだと思うんだけれども。

○谷村委員　　そういうところに思考を広げてみても、そういう事業が重要なところがあると。

○村上委員　　それは何か、何というんですかね、リターンがこっちのほうが大きいからこっちが優先とかというところまでのイメージがちょっと湧かない感じがしますけれども、そんなことはないんですか。

○谷村委員　　何かを決める。極端な話をすると、僕は多分そういう話をしているんですけれども、そのリターンの大きさというのをもっと評価しておくといいんだと思っているんです。

○萬羽部会長　　そうすると、そもそも、実際にこれを入れるかどうかは別として、評価するというこ

と自体が、今目指すべき姿を実現するために必要という、そこを考えていくことにしようか……。

○谷村委員　　そうですね。それを実現すると。

○萬羽部会長　　評価というか、評価という言葉が合っているのかどうかはあれなんですけれども、それ自体が今足りないのではないかということ。

○谷村委員　　その評価が重くなるように操作をする、端的に言うと。なので、例えばこの施策提言に１、２、３とあるのですけれども、さっきの「○、×、△」の話ですと、必然的に、例えば１割の方がフォーカスされるような文言を何行か多く入れていけば、当然その後の評価でその重みが重くなっていくじゃないですか。そういう調査になるようにすることで、施策提言をどう運用するかというところのビジョンまでもっと明確に見えると思うんです。

○鈴木隆行委員　ただ、そこまで定量化は僕はできないと思います。というのも、重みづけで、ある程度まで、もちろんマイノリティーは大切で、そちらにより手厚くというのは、多分多くの人が賛成してくれると思うんですけれども、それは多くの人が賛成してくれるというだけであって、全会一致にはならないと思うんです。小金井市の市民全員が必ずしもそうとはならないと思いますし。例えばマイノリティーを救おう、もう一回救おう、もう一回救おうとやっていったときに、３回目、４回目、ちょっとやり過ぎだろうというのが、人によってどこかで閾値が違うと思うんですよね。そういう何かアナログなところというのは絶対出てくると思うんです。そこまで含めて最初に決めてしまったら、何かもやもやするというか、これはちょっとやり過ぎなのにと思うのが出てしまうと思うし。例えば、究極のマイノリティーとして、小金井市で１人だけというところに重みをめちゃめちゃつけてしまうと、それはある種の我田引水的な話にもなってしまうと思うので、何かそれは結構ケース・バイ・ケースで議論しなければいけない、非常にアナログな話になってしまうのではないかなと思うんです。

○谷村委員　　そこはそう思うんですけれども、ごめんなさい。最初に、こう重みづけようという重みづけで、毎年、毎年、その重みを見直すということが必要なんだと思うんです。最初から、重みをつけませんと、何も評価しませんと、そういう定量的な評価は諦めますと、それはそれで一つの答えなんですけれども、そこから先はずっとどこまでいっても、どっちがいいのか、どっちが悪いのかというのは延々と多分……。

○鈴木隆行委員　だから、それはゼロか１００かで、重みをつけるのはやめましょうというのか、きっ

ちりつけましょうかではなくて、おおよそつけておくというぐらいですね。だから、まず最初に決めて修正というよりは、おおよそこういうのが大事だねというのを文言として盛り込もうというのが多分ここの趣旨なのではないのかなと理解しているんですけれども、それを数値として将来的に決めますというところまでいってしまうと、多分それは収束しないのではないのかなと思うんですけれども。

○谷村委員　　収束はしないと思うんです。そこは時代、時代の流れによって重みも変わると思いますし。ただ、今ここにこの時点で生きている我々がどう重みをつけたのかという意思なり結果というところでつけておいたほうが、より後の人には分かりやすいのかなと思います。あのときはこういうところが主にフォーカスされていたんだなと。

○水津職務代理　とりあえず、その議論もあるんだけれども、一番重要な、その先のところの「目指すべき姿」という文言が、確かに何かちょっと指標っぽく見えてしまうから、もう少し、「子どもの居場所の在り方」とか「子どもの居場所とは」とか、ここは概念的なことを語っているよみたいなことが分かるようなタイトルをつけて、そこの文言の中に私たちが今まで話したことを、括弧とかではなくて、例えば文章として載せたりとかして、そしてその後に「安全安心」とか、そのキーワードを、さっき言ったどんなプランもというところも含めてキーワードを出して、さらにその後に細かいものとしてどういう形のものが考えられるかというのを挙げた中で、それでまたその後に考えるというように段取りをつけないと、そこの議論を先にしてしまうと上が決まっていかないので、どうですかねと思うんですけれども。

○萬羽部会長　　ちょっとその話は多分並行して永遠に考えなければいけないとは思うんですけれども、ただ、一方でもう少し、例えば施策提言の話に戻ったときに、どういうことが必要かとか、どうすれば実現できるかというところでも、もう少し御意見を幅広くいただけるとうれしいなと思っているので、「目指すべき姿」という言葉自体を変えるというところはあるとは思うんですけれども、内容としては、今まで話してきたことを実現したいと私たちは思っているわけで、どうすれば実現できるかというところで、先ほど、例えば当事者からお話を聞くということもありましたし、場合によっては、市だけ、行政だけではなくて、民間とつないでいくみたいなこともこれに関与していたのだと思ったりもしたんですけれども、何かそれに関連してでもいいですし、ほかにアイデアとか御意見があればお願いします。お願いします、古源委員。

○古源委員　　先ほど、やりたいけれども場所がないという話が出ましたので、その場所の確保とい

うところが民間ではできないことがたくさんありまして、例えば市のほうで考えていただくというのが必要だと思うんです。今、学校施設のほうで体育館や校庭が、１７時半まで学童や放課後子ども教室に優先的に貸してもらえるように、この４月からなっているんです。なので、そういう方向性の中に市はあると思いますので、例えば今は体育館か校庭ですけれども、学校の空き教室がもっと有効活用できるとか、例えば「のびゆく」の中にも、公民館の利用というのがありますよね。子どもだけでも利用できるようにするとか、そういったことも並行的に検討していただくとか、そういったことをお願いしていく。それいった提言というのがあるかなと思います。

○萬羽部会長　ありがとうございます。

○水津職務代理　場所の問題で言えば、今ある施設を子どもの居場所として有効に利用していきたいということと、あと、ちょっと究極の理想だけれども、人が持っているものも貸してくれるようなところを一緒に探してもらうとか、空き家とか空き店舗とか、空きスペースとか。

○萬羽部会長　そうですね。今そういうのも、それはそれで問題になっていますものね、何か有効活用することはできないかと。

○水津職務代理　そういうものを子どもの居場所として使えるような支援をしてほしいとか、結局パイは決まっているんですよ、箱というのは。子どものための箱は増やせないではないですか。だったら、ほかの方法を考えないと場所は増えないので、それをうまく広げていけるようなことを一緒にやってほしいなと思うんですよね。例えば、ただ単にやりたいだけでは貸してもらえないけれども、行政の協力・支援があれば借りられるような場所が幾つかあるとか、あったらいいなとか。

○萬羽部会長　そうですね。

村上委員、お願いします。

○村上委員　ちょっと特化してしまうかもしれないんですけれども、ほかの自治体で先行事例みたいなものは幾つか聞いているものもあるので、そういうものの情報を何かしら取っていただきたいなというのがあって、一つの例としては、前回も言ったのですけれども、教育支援センターの改革ですね。今で言うもくせい教室というのは、ちょっとまだまだ課題があるかなと正直、私も前に行って思っていたんですけれども、聞くところによると、全国の教育支援センターというのはなかなか活性化されていないと。それはその人の取り方によるのでしょうけれども、その先行事例として世田谷区の例とかがあるじゃない

ですか。そういうものを、どこまでできるか分からないんですけれども、結構実現可能な施策として、もくせい教室をうまく利用するとかというのはあると思うので、その情報を何か少し取っていただいて、小金井に割と簡単に適用できるようなものがあれば、そこを取り入れたほうがいいのではないかなと思います。

○萬羽部会長　北脇委員、お願いします。

○北脇委員　すみません。施策提言の話で、具体的にどういったことができるかという話の中で、行政の方にやっていただくことは結構大きなことになっていて、市民の方が気軽にできるのは、その一番の声というか、例えば自分の子どもが当事者だったりとかしたときに、親として、大人としてどう関わっていこうか、そういうときにこういう場所が必要なんだよねと、子どもの声を聞くというのは、近くにいる大人が一番声が聞こえるんですよね。なので、その声を聞いた人が気軽に「では私、つくってみようかな。そういう場所をやってみようかな」と思えるようなシステム、それが持続可能なまちづくりの話になると思うんです。なので、そういうときの資金援助。気持ちがあっても、お金がないと、継続できない。もしくは、最初のうちは気持ちも熱かったので、やることはできたんですけれども、だんだん赤字がついてきたりとか、自分の持ち出しが多くなってきて、続けられない方というのもいらっしゃると思うんですね。そういうのがあると、どうしても次の担い手も育たないので、そこを援助するような継続資金みたいな、そういったシステムというか、仕組み、補助金を出すとか、何かそういう大きなものではなくて小さなものに対してというのを考えていただきたいなと、そういう文言を入れられないかなと思いました。

○萬羽部会長　ありがとうございます。今のでそういう何かを始めようかなと思ったときに、先ほど場所の確保という話もありましたし、今、資金の確保というのがありましたけれども、ほかに何か、こういうものがあればもっと実現できるのだけれどもとか、継続できるのだけれどもという問題等はありますか。もちろん、ほかの内容でも、全く違う観点でも結構ですが。

○北脇委員　すみません、続けて……。そうなると、場所としてといったら、それの告知ですよね。ここを見れば、そういう場所でやっているんだと分かるような、困ったときに、どこを調べたらいいか分からないというのだと困ってしまうので、情報が集まっている場所、担当課に聞けば、担当課が把握しているとか、広報につながると思うんですが。

○水津職務代理　それは、えにえにの活用ということではございますけれども。

○萬羽部会長　そうですね。あと、でも横のつながりは大事なのかなと思ったので、例えばこっちで聞き取って支援したときに、こっちとまた離れてしまっているとあれなので、そのえにえにとのつながりももちろんそうなんですけれども、何か横でつながるみたいな視点が提言の中に入ると、実現してくれればいいなという気持ちはあるんですけれども。

○水津職務代理　結局、行政の窓口というのはいろいろですよね。例えば公園を使って何かしたいんだとか、そういうことになるとまた担当が違うとかということになったときに、その居場所に関する窓口が、民間でもいいと思うんですよ。そういう拠点があって、そこに相談すれば、ではここと相談して何とかできるとか、そのようなことができるようなシステムがあったらいい。それは行政が何かつくってくれるのではなくて、どこかにその間をつなぐような役割を持てるような組織があれば、例えば行政が、小金井市が全部お金を出せるわけではないので、さっきも言ったけれども、相談していったら、では東京都のこれだったら出るかもとか、信用金庫がこういう助成金を出しているよとかというのを紹介して、ちょっとそこの補助をしてみるとかといったことが、コンサルみたいなことができるようなものがあれば。

結局何が言いたいかというと、一番上のところにまた戻ってくるのだけれども、小金井市の中で市だけで運営しているものだけではもう子どもの居場所はつくれない、保障できないということが大前提にあると思うので、それはどこかに入れたいんですよ、その文書の前文などで。それをカバーするためにも、でも、それでも子どもの居場所というのは、一個どこかに、例えば武蔵野プレイスみたいなものを一個つくったらそれでいいのか、そうではないじゃないですか。みんなが前から言っているように、子どもたちが歩いていけるような場所にたくさん子どもの居場所があることが理想なんだけれども、それを実現するためには細かいものが必要ということがあって、民間の人の支援とか、ネットワークづくりとか、そういうことが出てくるのかなと。

あと、言うならば、安全な場所といったときに児童館が本当に安全な場所なのかとか、建物的に言うといろいろあるんですけれども。

○萬羽部会長　なるほど。そうすると、では例えば児童館を安全な場所にするためには、何が今問題点になるのでしょうか。やっぱりお金の問題ということですか。

○鈴木隆行委員　設備も全然、もういいよというわけじゃないのよ、本当は。児童館だって、何か５館構想とかもある話だから、そう考えたときに、今のままでもう全然いいからとかという話ではないじゃないですか。だから、子どもの居場所を行政も積極的につくってほしい

ということは、それはやらなくていいと言っていることではなくて、それがあってさらにそのまちの中のいろいろな小さな居場所を保障してほしいということだと思うんですよね。幾ら金がないからといって、そんなに何もかも我慢する必要もないかなとも思って。

○萬羽部会長　その辺り、ちょっと前のほうに戻っていただいてもいいですから、何かほかに御意見とかがありましたら。鈴木委員、お願いします。

○鈴木隆行委員　場所についての話が出ましたけれども、前回言いましたように、理想は、どこでも居場所になり得る。じゅうたん爆撃ではないですけれども、全部整備するのがいいと思うんですけれども、第一段階として、それはできないとするならば、移動手段、移動経路をちゃんと確保することが大事かなと思うんです。小金井市には危ない道がいっぱいあるので、歩道もないような道がいっぱいあるので、それはどれぐらい市の力で何とかなるのか分からないですけれども、そういうものをここに織り込んでもいいかなというのと、極端な話、例えば夕方の時間帯のココバスをめちゃめちゃ増発して、小学生・中学生はただとかにしてしまって、バスに自由に乗ってしまえよというような方針とか、それぐらいやってもいいかなとは思うんですけれども、何かそんな移動手段とか移動経路というところを考えてもらってもいいかなと思いますね。

○水津職務代理　例えば交通、道を子ども目線で見直してほしいとか、要求みたいになってしまうのはちょっとどうかなと思うんだけれども。

○萬羽部会長　でも、安全性の確保という意味では。

○水津職務代理　そこは必要ですよね。

○萬羽部会長　バスの増発に限らず、例えば歩いていける範囲でも、そこは本当に夕方まで歩くのに安全かとかという問題は大事な観点だと思います。

○鈴木隆行委員　児童館とか公民館だって、場所は足りていないわけですよね。だから、本当に使おうと思ったら、遠くに行かなければいけないか、使わないかということになってくる。

○萬羽部会長　そうですよね。どっちかで、ですよね。前から水津委員がよくおっしゃっているように、徒歩圏内というか、学校区の中でまずその場所が本当にあるかどうかだし、場所がないのだったら、確かに今、鈴木委員がおっしゃっていたみたいに、移動できる手段を提供するというのが、でもどちらもどこでもということに本当につながることになるので、要望になっていいのか分からないけれども。

○水津職務代理　要望的なのはちょっとまずいから、書き方にはちょっと工夫が必要だと思うんだけれ

ども、要望書を書くわけではないからね。

○萬羽部会長　　そうですね。観点としては大事なんですが。

○水津職務代理　あと併せて言うなら、またこれはここに入るかどうかは分からないけれども、子どもの意見を反映するという観点から言うと、その場所は子どもの意見が尊重される場所であるべきということで、それはどうやったら保障できるのだろうね。

○萬羽部会長　　逆に言うと、子どもの意見が尊重されない場所というのはどういう……、というか、こういう問題があるとかでもいいんだけれども。

○水津職務代理　一個言うならば、公園の問題が結構今あって、公園が子どもたちが自由に使える場所ではなくなってきていて、いろいろルールが子ども仕様になっていないんですよ。何も公園を子どもだけに占用させろとかと言っているわけではないんだけれども、そのルールを子どもたちと一緒に作れるようにするとか、何かそういう室内だけではなくて屋外のルールみたいなものももしかしたら必要なのかなとか、とにかくボールは駄目、騒いでは駄目、何人いては駄目とか、駄目駄目公園だから、何か、例えば何曜日だけでも使えるとか、ちょっとした工夫でもいいけれども、とにかくもう少し子どもたちが遊べるような場所にしてほしい。公園はまた公園課が別の管理をなさっているのでしょうから、難しいのでしょうが。

○萬羽部会長　　そうですね。そういう意味で本当に子どもを取り巻く関係する部署は横につなげるみたいなことは入れ込みたいですね。

○北脇委員　　そうですね。小金井市全体の大人と子どもの成長を見届けるみたいな、見守るみたいな、そういうのが欲しいですよね。

○水津職務代理　大きい公園は不審者が出るから行けないし、小さい公園は怒られるから行けないし。

○萬羽部会長　　難しいですね。そうですよね。そうなってしまっていますものね、現実に。それはちょっと変えたいですよね。

○水津職務代理　図書館も残念だし。

○萬羽部会長　　図書館はどのように。

○水津職務代理　まず小金井図書館を見ていただければ、残念感が伝わると思うんですけれども、子どもが行って学習するスペースとかも十分ではないし、蔵書も子ども向けになっているかというと、ちょっと厳しいものもあるし、貫井南の図書館はかなり充実していると思うんですけれども、あとは分室なんだけれども、緑分館とか……。

○北脇委員　　図書館が、本を借りにいくためだけのスペースになっていて、子どもがそこで何か選

んで、読みながら長居をしたいと思えるようなところではないんですよね。そこを子ども目線で書いていただけると……。

○水津職務代理　だから、新しい場所の開拓ももちろんあるし、今ある場所をもう少し子どもたちの意見を取り入れて使いやすい場所にすることも保障できないといけないかなということですね。

○萬羽部会長　　そうですね。

一応、予定した時間にそろそろなりそうではあるのですが、もしここで追加で何かあればと思うんですが、いかがでしょうか。

すみません、ちょっと個人的に思っていたのは、先ほどの「目指すべき姿」をちょっと文言を変えて「子どもの居場所とは」とするというのはとても賛成ですし、併せて、何か、せっかく今まで谷村委員がよく子どもの言葉という中で挙げてくれていたようなことがちょっと入ったほうがいいのかなとは個人的にはちょっと思っていて、施策のほうはちょっと難しいと思うので、「目指すべき姿」とかのほうを、そのタイトルを変えつつ、さらに、古源委員も最初におっしゃったように、子ども目線だということをよりアピールできるというか、それが伝わるような表現の部分もあってもいいのかなとちょっと思ったりはしました。

では、よろしいでしょうか。特に何かございますか。大丈夫ですか。

では、これに関しては、次回の会議で引き続きというか、施策提言についてもう少しここを基に詰めていくという形ですね。

○子育て支援課長　そうですね。

○萬羽部会長　　なので、またちょっと、これでこの議論が終わりというわけではないので、次回以降も引き続き御意見をいただければと思います。

それでは、次第の（２）は以上とします。

本日の審議事項は以上です。

最後に、事務局から次回の予定につきまして連絡事項をお願いします。

○子育て支援係長　次回の日程ですが、５月３１日月曜日になりますけれども、午後７時から、場所はこの８０１会議室を予定しております。

また、コロナの感染状況等によりましては、オンラインにする、もしくは延期にするといった御相談をさせていただく場合もございますので、よろしくお願いいたします。

事務局からは以上となります。

○萬羽部会長　　それでは、以上をもちまして本日の会議を終了いたします。ありがとうございました。

――　了　――